

「無くした銀貨のたとえ」

2015年10月06日

ルカによる福音書 15章8節～10節。「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

ドラクメ銀貨 10枚を持っている女性がいた。ドラクメ銀貨はギリシアの貨幣で1デナリオンと等価である。1デナリオンは1日分の生活費と言われている。そのドラクメ銀貨の1枚を無くした。彼女はともし火をつけ、家中を掃いて、見つかるまで探し回った。ユダヤでは既婚女性は鎖に10枚の銀貨をつけて、髪飾りにしていた。結婚指輪と同じ意味を持っていた。借金の返済にも、その銀貨を要求することができないほど、女性によって大事なものであった。そして、ユダヤの家屋は窓が小さく、部屋は薄暗い。彼女はともし火をかざし、必死で探したのである。そして、ようやく見つけることができた。友達や近所の女性たちを呼び集め「無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください」と喜びを分かち合った。主イエスは、この譬えを語った後「言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」と結ばれた。失われた罪人が神に見出されることは天において大きな喜びであると語られたのである。

興味深いことは、神が女性に例えられていることである。無くした銀貨、罪人を女性である神が探し、見つけ出して喜ぶとしている。聖書では通常、神は男性として捉えられている。フェミニスト神学では、神を父と呼ぶことに異議を唱え「親なる神」とか「父、母なる神」と呼ぶべきであると主張している。確かに、聖書の文化は家父長制を基盤にし、神は男性として描かれている。しかし、神を母親のような存在として、描いているケースもある。ルカ福音書 13章34節で、主イエスはエルサレムのために嘆いて、次のように言っている。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」また、詩編 57章2節に「憐れんでください／神よ、わたしを憐れんでください。わたしの魂はあなたを避けどころとし／災いの過ぎ去るまで／あなたの翼の陰を避けどころとします」と歌っているように「翼の影」という表現は多い。これは母鳥の翼の影である。イザヤ書 34章15節に「ふくろうは、そこに巣を作って卵を産み／卵をかえして、雛を翼の陰に集める。そこに鳶も、雌も雄も共に集まる」と書かれている。ふくろうは母鳥で神の守りをイメージしている。

神を優しく守る母性と捉えているケースはあるが、見失った罪人を探し回る神を女性と例えていることは珍しいと言える。主イエスは男性も女性も差別なく対応されているので、神を女性に例えても違和感はなかったのではないか。

洗礼者ヨハネの悔い改めは公平と正義を求める倫理的要請の強いものであった。主イエスが求める悔い改めは神の招きに応えることである。神の招きは全ての人を「よし」としてくださる是認への招きである。この是認は私の生が神に根拠があることの承認で、ニヒリズムからの脱却である。そして、共に生きることへと向かわせる。神はこの招きに応えるように探し回り、それを見出した時、天に喜びがあると言う。